生真面目な滑稽 ③

高橋真紀子

文芸評論家の山本健吉氏によれば、句会のルーツといえる俳諧の座は、元々、寄り合いや茶飲み話の延長にあった。噂、皮肉、猥談といった村の人々に通じる共通の生活体験が題材となり、その場限りの楽しみで詠まれたらしい。だから多くは詠み捨てられ、今日残っているものは極めて少ないのだそうだ。一方、現代の滑稽俳人たちは、その場限りの楽しみでは飽き足りない。できれば、時代を超えて残せる滑稽句を詠みたいと思っている。どうしたらいいだろう。

そのヒントを夏目漱石に探ってみる。

前に、高浜虚子が「真面目な凝視のうちに滑稽が生まれる」と語っていることを紹介した。実は正岡子規も「墨汁一滴」の中で真面目と滑稽について書いている。俳句仲間の中で滑稽を発揮して成功したのは、とても真面目な漱石であり、真の滑稽は真面目であって、はじめてなし得るのだろうと。

明治の文豪漱石には、神経衰弱や胃潰瘍の持病も手伝って、気難しい印象がある。しかし、実際は、人情味や洒落っ気も併せ持った人物だったようだ。約２６００句といわれる漱石の俳句には滑稽や面白いエピソードが満載だ。

鳴くならば満月になけほととぎす

これは、学生時代の句。試験で落第した「畏友」の子規にあてて、大学を退学せずに卒業するよう薦めたものらしい。「満月になけ」と、子規に

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

エールを送っているのだろう。そして、ロンドン留学中に子規の死を知った時は、「**筒袖や秋の柩にしたがはず**」と詠んでいる。

家族にまつわる句も面白い。長女筆子の誕生の際は、生まれた時の感慨を「**安々となまこの如き子を生めり**」としたためた。そして小説「我が輩は猫である」のモデルとされる夏目家の猫が死んだ時は、書斎裏にこさえた墓に「**この下に稲妻起こる宵あらん**」と記した。そして、親しい人たちに「死亡通知」まで出したという。

漱石の死後、妻鏡子は「後では、冷たい、理知的な、物を離れて眺めてだけいる人のようにとられもしたようですが、元来ずいぶんと情深い情味の厚い人だったと思われます」と語っている。

漱石の句の知的な可笑し味は、物事や人に向けられた真摯な眼差しから生まれたのだろう。

「生真面目な滑稽」と題して、くどくどと書いてきた。秀逸な滑稽句は、上滑りするその場限りの笑いではなく、詠み手の「真面目」が生み出すウイットの賜物なのだと思う。ただ、残念なことに、私にはそんな巧い句は詠めない。

※**参考文献**「俳句の世界」（山本健吉　講談社）「漱石の思い出」（夏目鏡子述　松岡譲録　文藝春秋）「漱石俳句集」（坪内稔典編　岩波書店）「墨汁一滴」（子規　岩波書店）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。